

# 教員評価制度を通じたシラバス改善に向けた提言

門内 章 (APU アドミニストレー  
ション・オフィス課長補佐)  
伊藤 昇 (大学行政研究・研修  
センター専任研究員)  
谷中 晃 (APU 副事務局長)  
若井ます江 (APU アドミニストレー  
ション・オフィス課長)

- I. はじめに—研究の目的
- II. シラバスの定義と役割および項目
  1. 「シラバス」と「科目概要」の違いとその関係
  2. シラバスの役割
    - (1) 「契約書」としてのシラバス
    - (2) 学生の自学自習を促すシラバス
    - (3) 大学の「教育内容や水準」を外部的に  
向け  
て発信するシラバスの役割
  3. シラバスの構成項目
- III. シラバスの事例研究—ハーバード大学のシラバス
  1. ハーバード大学におけるWEBページの構成
  2. ハーバード大学のシラバスの特徴
    - (1) 「課題レポート」と「成績評価方法」を詳  
細に明示していること
    - (2) 毎回の授業スケジュールに「予習してお  
くべき文献リスト」と「授業で取り扱う該  
当ページ」が明示されていること
    - (3) 担当教員によりシラバスの書き方は千差  
万別であること

- IV. APUにおけるシラバス
  1. 2名の教員へのインタビューのまとめ
  2. 2名のAPU学生へのインタビューのまとめ
- V. 学生のシラバスアンケートから見るAPUシラバ  
スの評価
  1. これまでのシラバス検討のまとめ
  2. アンケートの設計と対象
  3. アンケートの集計と分析
    - (1) 科目選択時におけるシラバスの活用
    - (2) シラバスの記載内容による勉学意欲のか  
き立て
    - (3) シラバスにおいて参考になっている項目と  
役立っている項目
    - (4) 小括
- VI. まとめ—政策提起
  1. APUシラバスの充実改善にむけた提起
  2. 教員評価制度における「シラバス評価の着眼点」  
の作成

## I. はじめに—研究の目的

現在立命館アジア太平洋大学では（以下、APUとい  
う）教員評価制度の導入に向けた取組を行っている。本  
学の教員評価制度は、①教育分野、②大学サービス分野、  
③研究分野から構成されている。

これまで、大学教員は主として「研究業績」により評  
価されてきた。しかし、大学という高等教育機関に所属  
する大学教員は、「研究者」であると同時に、「教育者」  
でもある。特に新設大学であるAPUにとって、教員の  
「研究業績」とともに「教育面での実績」が学生募集や  
社会的な評価を得る上で決定的に重要である。

「教育面の実績」とは、教育制度、教育システム、教  
育体制、教育条件など、組織・制度・機構が関係すると  
ともに、より直接的には、教員と学生のすべてのかかわ  
り方によって作られるものである。教員と学生とのかか  
わり方は、科目の目的や授業の目標の達成に向け、シラ  
バスにはじまり、履修登録、授業、課題やレポートの提  
出、そして評価などが系統立てて構成されたシステムと  
して機能している。教員評価制度における教育分野の評  
価は、これらのシステムの構成要素が科目の目的や授業  
の目標の達成に向けてどのように相互に貢献し、科目の  
目的や授業の目標が達成されているのかを明らかにする  
ことである。

本研究の目的は、上記の考え方にに基づき、第1に教員と学生の最初のかかわりであるシラバスについて、学生の教育と学習に果たしている役割を明確にし、シラバスの充実改善に向けた提起を行うことである。第2の目的は、シラバスの充実改善を担保し、その取り組みを促進するために、教育分野における教員評価制度の1項目として「シラバス評価の着眼点を作成し提起すること」である。

本研究は、APUのシラバスと他大学（ハーバード大学）のシラバスとの比較分析およびシラバスの各項目において、学生の受け止めと活用に重点をおいた受講生へのインタビュー調査とアンケート分析によって行う。シラバスの各項目において学生の受け止めに重点を置くのは、シラバスの記載内容が学生の知りたい情報を満たしているかどうか（シラバスの完成度）、さらにそれが学生の学習への動機づけになっているかどうか、そしてこれらのことが学生の「満足度」に相関があると仮定をおいたことによる。

## II. シラバスの定義と役割および項目

研究対象はシラバスであるので、まずシラバスの定義を再確認する。その上で、シラバスの持つ役割について整理を行い、シラバスの項目について概観する。

### 1. 「シラバス」と「科目概要」の違いとその関係

シラバスは一般的に、「講義概要」と訳される。文部科学省のホームページ<sup>1)</sup>で「シラバス」と入力し検索すると、以下のように記述されている。

「シラバス」とは、

授業科目の詳細な授業計画のことをシラバスと言い、一般的には授業名、担当の教員名、講義の目的、各回の授業内容、成績評価の方法や基準、準備学習についての指示、教科書・参考文献、履修条件等が記載されています。シラバスは、学生に科目選択のための情報を提供する役割の他に、授業期間全体を通じた授業の進め方を示すとともに、各回の授業に求められる予習についての具体的指示を提供するという役割があり、後者の役割を充実していくことが重視されています。

これを簡潔に整理すると、次の通りとなる。

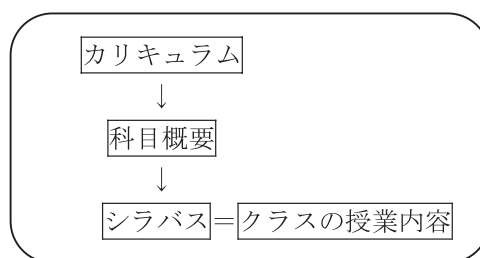
- (1) シラバスとは、授業科目の詳細な授業計画である。
- (2) シラバスの役割は次の3点である。
  - ・科目選択のための情報の提供
  - ・期間全体を通じた授業の進め方の提示
  - ・予習の具体的指示
- (3) 予習の具体的指示の役割を期待している。

「(1)」はシラバスの定義である、「(2)」はシラバスの役割であり、「(3)」は文部科学省としての評価・判断である。以下この定義と役割を参考としながら議論を進めていく。

シラバスと同様なものに「科目概要」がある。「シラバス」と「科目概要」について、本稿では次のように定義する。

各クラスで展開される授業内容は、本来、大学や学部の「教育目的や目標」に沿って系統的に構成されたカリキュラム体系（教育目的・目標⇒分野⇒科目⇒各クラスの授業内容）の中に位置づけられている。そうでなければ、各クラスにおける授業内容は担当教員に全面的に委ねられることになり、大学全体の教育目的や目標が大学や学部等の組織的・系統的な教育によって実現されないことになる。シラバスと科目概要の関係をやや図式的に整理すれば、次のようになる（図1）。

図1 シラバスと科目概要の関係



科目概要は、カリキュラム上の「科目の位置付け」を示すものであり、いふならば教育目的や目標を実現するために「何を学ぶか」を示すものである。一方、シラバスは科目概要の位置づけを講義の目的とし、「どのように学ぶか（あるいは、学んでいくのか）」を示すものである。従って、シラバスの上位には、科目概要がなければならない。この点は、シラバスを議論する上で前提と

なる基本構造であるので、最初に確認しておく<sup>2)</sup>。

## 2. シラバスの役割

文部科学省はシラバスの役割を、科目選択のための情報の提供、期間全体を通じた授業の進め方の提示、そして予習の具体的指示と3点にまとめていた。これを教員が学生に向けて発信したメッセージという視点から、主にアメリカでのシラバスの議論を敷衍する。

### (1) 「契約書」としてのシラバス

荻谷剛彦氏は著書で、「シラバスとは、教育サービスの売買における商品の詳細な『カタログ』であることと見ることができる」と述べている<sup>3)</sup>。また、同氏は自身のアメリカ・ノースウェスタン大学での授業を担当した経験から、次のような指摘を行っている。

アメリカの大学生は、「消費者意識」が強い。高額な授業料に見合うだけの教育サービスを受けられるかどうか、日本の学生以上に厳しい選択の目を持って教育を選ぶ。

教員は授業開始時に学生に対し、「授業の目的や到達点、取り扱う内容」をはじめ、「成績評価をどのように行うのか」や「学生に期待すること」、「授業期間中のレポート課題とその提出期限」について明示しておく必要がある。これらの点を明確にシラバスに記載しておかないと、後日学生との間でトラブルになるという。

特に「成績評価方法」については、単に「中間試験と期末試験の持分割合」を明示するだけでなく、「学生の授業中の発言は評価するのか」、「課題を提出期限後に提出した場合の措置はどうか」などもはっきりと書いておくべきと指摘する。

一方学生は、シラバスの記載事項を了解して履修登録を行う。よって、この過程を経て学生が履修登録をした場合、シラバスは「教員」と「学生」との間に成立する「契約書」としての性格を持つ。「契約書」としての性格を持つシラバスは、記載内容を簡単に変更することはできない。もっとも学生の習熟度にしたがって、学習内容や進行を臨機応変に対応するのも教員の重要な役割である。しかしその場合には、「変更点を文書で明示すべき」との指摘もある<sup>4)</sup>。特にWEB上に掲載されるシラバスは、変更が容易な分、この点に注意を払うべきである。

### (2) 学生の自学自習を促すシラバス

本来学生は授業中の学習だけでなく、予習や復習といった自学自習を求められ、その結果科目の学習目的や目標に到達する。シラバスは、この自学自習を促す重要な役割を担う。

日本の単位制度は、1単位あたり45時間の学習を基本としている。APUでは90分（＝APUでは90分を2時間として換算している）の授業を15回実施し、合格した学生に2単位を与えている。従って、合計30時間の自学自習時間を見込んでの単位認定となっている。

ところで、アメリカの大学では、授業中に活発な議論を行うことが多い。教員はシラバス上で「各回の講義テーマ」を明らかにするとともに、「事前に読んでおくべき文献とその範囲」（＝リーディング・アサインメント）を明示する。学生は授業前にシラバスをチェックし、授業準備を行う。授業はリーディング・アサインメントを読んできたことを前提に展開される。この点については、次章の「ハーバード大学のシラバス」で詳しく説明する。

講義形態の授業でも、シラバスには毎回の講義テーマ（トピックス）、内容、準備学習などが明示されており、授業を効果的、効率的なものにしている。

以上の点は、文部科学省のシラバスの記述における「予習の具体的指示」について、「今後充実されていくことが重視されている」と強調されていたことと符号している。

### (3) 大学の「教育内容や水準」を外部に向けて発信するシラバスの役割

「II-1. シラバスと科目概要の違いとその関係」で触れた通り、まずカリキュラム体系の中において、各科目で取り扱う内容が決められる（＝「科目概要」として示される）。そしてそれにしたがって、各クラスの授業が実施される。シラバスは、「各クラスにおける授業内容のカタログ」であり、「どのように学ぶか」を示したものである。従ってシラバスは、大学の「教育内容や水準」を表す。大学の外部評価が進んでいるアメリカでは、評価者はまず「シラバスを参照」して、各大学の教育内容や水準を判断する<sup>5)</sup>。

また、学生が他大学で取得した単位を自身の大学で認定申請する場合、大学は認定の是非を判断する必要がある。この際、シラバスが重要な役割を果たす点について

も触れておきたい。これもアメリカの事例であるが、学生が夏期休暇中に帰省した際、帰省先にある大学で夏期集中講座を受講する。学生は、自身の大学に戻った際、他大学で取得した単位の認定申請を行う。申請を受けた大学は「単位認定の可否」を「その大学のシラバスを見て」判断する。つまり、学生が他大学で受講したクラスが、単位を認定するに値する教育内容や水準に達しているかどうかを「シラバスを見て」判断するわけである。APUは世界中から学生が学びに来ており、実際この点についての問題も生じている（この点については、「IV. APUにおけるシラバス」で触れる）。

最後に、近年では企業や高校、受験生、父母がシラバスを「大学の教育内容や水準を評価する指標」として活用していることも付け加えておきたい<sup>6)</sup>

シラバスの簡潔、的確な記述と公表は、大学の第3者評価を待つまでも無く、大学の教育の内容と水準のアカウンタビリティであり、実質的な社会的評価の機能を果たしている。大学は、積極的に全学的にシラバスを充実したものにしなければならない。本研究は、この意味においても重要な意義を有していると考えている。

### 3. シラバスの構成項目

本稿作成にあたり、資料として主に次の3つの文献と論文（以下、「文献」という）を参考とした。

資料1. 文部科学省の「シラバスの内容項目別の状況」調査項目による

資料2. 荻谷剛彦 『アメリカの大学・ニッポンの大学』玉川大学出版部 2000年

資料3. Lockhart, Marilyn. "Academic Exchange Quarterly." Syllabi for today's college classes., 2004

以上の文献で取り上げられている「シラバスの構成項目」とAPU、早稲田大学、一橋大学のシラバス項目を一覧にして、以下の表1にまとめた。これらの項目は、「シラバスの項目」を比較するために各文献の中で取り上げられた項目を列挙したもので、それぞれの文献で必ずしも「シラバスの必須項目」としているわけではない。

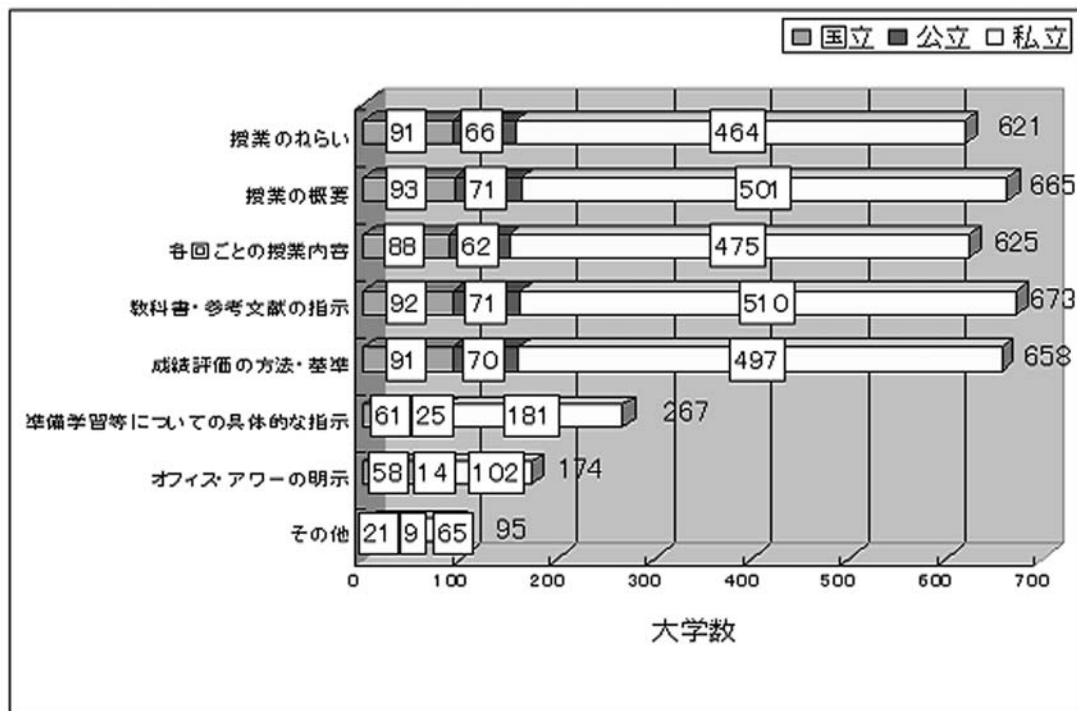
資料3. の文献に見るシラバスの項目は、「履修契約書」とでも呼べる詳細なものである。APUのシラバスは、そこまで詳細なものではないものの、项目的に整備されている。

表1 シラバスの項目一覧

シラバスの構成項目	資料1	資料2	資料3	APU	早稲田	一橋
講義の目的	○	○	○	○		○
授業の概要	○		○	○	○	○
毎回の授業スケジュール	○	○	○	○	○	○
成績評価の方法	○	○	○	○	○	○
教科書、参考文献の指示	○		○	○	○	○
文献の入手方法		○	○			
準備学習などについての指示	○		○	△		
教員との連絡、相談の方法	○	○	○	○		○
出席に関するポリシー			○	△		
課題の明示			○	△		
期限に遅れた課題提出に関するポリシー			○			
再試験に関するポリシー			○			
論文を書く場合の引用方法の明示			○			
カンニングや剽窃行為			○			
学生に期待すること			○	○		○
障害を持った学生への対応			○			
履修条件		○		○	○	○

注) ○は専用の記載項目を設けていることを意味する。△は専用の記載項目を設けていないが、別の項目に「各種項目の記載がある」を意味する。

図2 国公立大学のシラバス項目



また、図2の文部科学省の調査によるシラバスの項目を見ると、準備学習の具体的な指示、オフィス・アワーが他の項目に比して極端に少なくなっている。特に公立大学と私立大学が目立っている。

文部科学省のシラバスの3つの役割、すなわち「科目選択のための情報提供」、「期間全体を通じた授業の進め方の提示」、そして「予習の具体的な指示」に照らして判断すると、表1においても図2においても、「予習や準備学習の項目」が少ない。日本におけるシラバスの位置付けや役割の理解において、予習の具体的な指示に「弱さ」があることを示している。

なお、当然であるが、シラバスはその役割に則して十分な記述があつてこそ、はじめてシラバスの役割が発揮させられるものであり、いかにその項目が網羅的であっても、学生の学習を促進する、あるいは動機付ける記述がなければ、それは「画餅」に帰することになる。以下、この点について留意しながら検討を進めていく。

### Ⅲ. シラバスの事例研究—ハーバード大学のシラバス

シラバスの事例研究として、ハーバード大学のシラバスを取り上げる。ハーバード大学のシラバスを事例研究

の対象とした理由は、①ハーバード大学は全米で教育、研究両面で最高の評価を得ている大学であること<sup>7)</sup>、②ハーバード大学はWEB上で詳細なシラバスを掲載していること<sup>8)</sup>による。

今回対象としたハーバード大学のシラバスは、Harvard College（学士課程）で、Faculty of Arts and SciencesのDepartment of Sociology（社会学科）のものである。理由は、APUの大半のシラバスが学部用であることと、APUの2学部の内、アジア太平洋学部（APS）は、社会学を基礎とした学部であることによる。

#### 1. ハーバード大学におけるWEBページの構成

ハーバード大学のWEBページ上の「開講科目一覧」、「科目概要」、「シラバス」の掲載の仕組みは、次のようになっている。

Harvard Collegeのホームページから、Academic Coursesを選択すると、Courses of Instructionのページへリンクが貼られている。その中には、Department（学科）のリストが表示され、ここでSociologyを選択すると、約70ある開講科目が表示される。ここには、コースレベルごとに以下の情報が表示されている（表2）。さらに、この中にシラバスへのリンクが貼られ、学内外を問わずシラバスを見ることができる。

表2 ハーバード大学 Department of Sociology  
の開講科目情報

1	科目名
2	Catalog Number
3	担当教員名
4	曜日
5	時限
6	試験の種類
7	科目概要

このようにシラバスを公開しているのは、ハーバード大学がシラバスの内容について、さらには教育内容と水準について、相当の自信と確信を持っている証であろう。それは、シラバスの公開が、大学の教育内容や水準、学生の学習の到達度、さらには教員の授業レベルについて、社会的な評価を受けることになるからである。

## 2. ハーバード大学のシラバスの特徴

私が調査した限りにおいて、ハーバード大学の Department of Sociology のシラバスには、以下のような特徴があった。特に、“Sociology 10-Introduction to Sociology Fall 2004” を参照し、そこに記載された具体例を以下の括弧内で紹介する。

### (1) 「課題レポート」と「成績評価方法」を詳細に明示していること

単にレポート課題を学生に提示するだけでなく、「提出期限」を明示していること（緊急事態を除いて期限に遅れたレポートを受け付けない点）や、レポートの「評価方法」を提示していること（レポートは「長さ」ではなく、「内容」や「構成」により評価をすること）、さらに課題レポートで「A」を取得するにはどうすればよいか、まで詳細に記述してある。

その他、「レポートを書く上での注意点」を事前に指導している。これらの記載から「契約書」としてのシラバスの役割が見てとれる。

### (2) 毎回の授業スケジュールに「予習しておくべき文献リスト」と「授業で取り扱う該当ページ」が明示されていること

授業スケジュール表に「授業ごとの主題」を記載

するだけでなく、「リーディング・アサインメント」が明記されている。しかもかなりの分量になる（1回の授業で100ページを超える課題）。これは、「予習を促すシラバスの役割」を果たしている。

### (3) 担当教員によりシラバスの書き方は千差万別であること

APUでは、シラバスの記載項目は決まっている（執筆は各教員が直接WEBページに入力している）。これに対し、ハーバード大学の社会学科のシラバスは決まったフォームがなく、教員により様々である。

## IV. APUにおけるシラバス

### 1. 2名の教員へのインタビューのまとめ

「APUにおけるシラバスの課題」について、2名の教員へインタビュー調査を行った。インタビューで2名の教員が強調されている第1は、文部科学省のシラバスの役割に沿って「学生が理解しやすく記載すること」である。第2は、シラバスが「科目の概要に沿って的確に記載されなければならないこと」と、それを「点検、評価、調整する責任体制が必要なこと」である。これらの内容は、教員評価制度の教育分野のシラバス評価のポイントとなる点である。以下はインタビューの詳細である。

#### (1) A教授

【質問1】シラバスを作成する上で重視する点について

【回答】学生はシラバスを見て履修登録をするので、「授業の概要」を理解できるよう、簡潔に作成することを心がけている。

【質問2】「APUにおけるシラバスの課題」について

【回答】シラバスは「講義概要」なので、授業の自身自体を表現したものである。よって、学生がシラバスを見て各クラスの授業内容を一目で理解できるものでなければ、十分なシラバスとはいえない。

また、APUのシラバス（＝授業内容）は、「組織（系統）立った」ものになっていない。本来1回生や2回生で教えるべき内容が、4回生配当のシラバスに出ている場合がある。

これまで何度か学生から、「このクラスとあのクラスは配当回生が異なるが、シラバスを見ただけではどのような違いがあるのか理解できない」と質問を受けたことがある。本来、特定分野の教員同士が講義開始前に協議し、「お互いの役割分担」と「授業内容」を決める必要がある。こうすることで、各クラス間の違いや関係がシラバスに反映する。

以前、学部内の同じ分野の教員が集まり、私がリーダーとなって各教員が担当する授業の内容を協議したことがある。その際、シラバスに記載すべき内容も基本的に私がリーダーシップを発揮して役割分担を行った。このように、本来同じクラスター（科目群）の教員間でコミュニケーションを図り、お互いの授業を体系だったものにする必要性を感じている。

また、責任ある立場の教員が、全シラバスをチェックして、「大学が求める科目概要」に沿った内容になっていないシラバスがあれば、即修正を求めるべきだと思う。現在、「科目概要がない」ことも大きな課題の一つだと思う<sup>9)</sup>。

【質問3】シラバスの持つ役割について

【回答】シラバスは「学生の履修登録時のガイド」となるだけでなく、学外の人向けにも重要な役割を持つ。大学が第三者評価を受けると、評価者は真っ先に「シラバスの内容」をチェックする。なぜなら、シラバスの中身を見れば、その大学で行われている教育内容や水準を把握できるからである。

短期間APUで学ぶ学生（非正規生）がAPUで取得した単位を自身の大学で単位認定の申請をした際、その大学の担当者はAPUのシラバスを見て「認定の可否」を判断する。これまで何名かの非正規生から「自身の大学において、APUで取得した単位の認定を申請したところ、APUのシラバスを見た限りでは、単位認定可能な授業内容になっていない」として許可されなかったとの、残念な報告例がある。

## (2) B教授

【質問1】シラバスを作成する上で重視する点について

【回答】「理想的なシラバス」とは、読むだけで、その講義の全体的なイメージが湧くようなシラバスを指す。さらに、学生が私のシラバスを読んで、「このクラスを履修しよう」と働きかける力も必要だと思う。

「コースの概要」や「コースのねらい」、さらに学生が将来、この授業を履修したことで「どのように活かされるのか」について、学生の視点に立って書くことに留意している。

授業準備として、毎回の授業をどのように進めるのか、どんなテキストを使えば効果的かを考え、シラバスを作成するように心がけている。

また、受講生に予習と復習、試験準備を促すよう促すには、「毎回の講義の概要」、や「試験予定」をシラバスに記載しておくことが大事だと思う。

最後に、学生は専門用語を理解できないので、「授業のねらい」と「到達目標」はできる限り専門用語の使用を避け、平易な文章で書くように心がけている。

【質問2】「APUにおけるシラバスの課題」について

【回答】シラバス全体をチェックする人が必要だと思う。シラバスは授業の内容を表現したものであるため、授業内容（＝シラバスの内容）をコーディネートする人が必要です。現在、同じ専門分野の先生同士が授業内容について協議をする公式な場がないので、シラバスを見ない限り、他の先生がどのような授業をやっているのか分からない。これでは、体系だった教育を実現できない。

## 2. 2名のAPU学生へのインタビューのまとめ

APUの学部学生計2名（国内学生と国際学生1名ずつ）に、「シラバスの活用実態と課題」について、インタビュー調査を行った。この調査で得られた特筆すべき点は、次の2点であった。

(1) シラバスは担当教員が直接記載しているの、講義内容に（個人的な）偏りがなくどうか気

になる。きちんと大学がチェックしているのかどうか心配である（国内学生）。

- (2) 履修登録時に「詳細なシラバス」を見たいと思うが、実際は「講義の中で説明をする」といった記載がよくある。また、シラバスに記載された進行予定と実際の進行に相違が生じる。変更が生じて、先生からは何の説明も受けない。この点は、おかしいと思う（国内学生、国際学生）

① Cさん（アジア太平洋マネジメント学部4回生 男性、日本出身）

【質問1】履修登録する際、シラバスを活用していますか？

【回答】基本的にシラバスを見て、履修登録をしているわけではありません。理由は、APUの場合、履修可能なクラスが限定されているので、「選択肢の幅」が非常に狭いからです。1回生や2回生では、30単位を登録する場合、20単位程度はすでに履修クラスが決まっているので、10単位分のクラスしか「選択の余地」がありません。その中で、シラバスを見て優先順位をつけます。

【質問2】受講期間中や受講終了後、シラバスを参照しますか？

【回答】実際あまり活用していません。受講期間中、「成績評価方法」を確認する程度の利用です。

【質問3】履修登録時、「シラバスのどの項目」を主に参照しますか？

【回答】「成績評価方法」が一番気になります。

【質問4】「成績評価方法」のどのような点に着目して、履修登録をしますか？

【回答】私は、「レポートが苦手」なので、その比率が高くないクラスを受講するようにしています。

【質問5】その他、「APUのシラバスにおける課題」があれば、教えて下さい。

【回答】シラバスに記載された進行予定と実際の授業の進行に違いが生じることがよくあります。その際、先生から「変更になった理由説明」

はほとんどありません。

また、シラバスは担当する先生自身が記載するものなので、「講義内容」に担当する先生の「個人的な偏り」がないかどうか心配になります。この点について、大学側がきちんとチェックしているのかどうか、気になります。

② Dさん（アジア太平洋学部 2回生、女性、ベトナム出身）

【質問1】履修登録する際、シラバスを活用していますか？

【回答】はい、活用しています。

【質問2】受講期間中や受講終了後、シラバスを参照しますか？

【回答】いいえ、ほとんど見ません。

【質問3】履修登録時、「シラバスのどの項目」を主に参照しますか？

【回答】「成績評価方法」を見ます。「期末試験の割合が高いクラス」を受講しようと思い、その点を見ています。

【質問4】その他、「APUのシラバスにおける課題」があれば、教えて下さい。

【回答】履修登録の際、「詳細な授業計画」を見たいと思うが、実際は「講義の中で説明する」といった記載が多く、シラバスを見ただけではイメージが湧きません。また、よくシラバスに記載された進行予定と実際の授業の進行に違いが生じることがあります。この場合、担当の先生から何の説明もなされないのは、おかしいと思います。

## V. 学生のシラバスアンケートから見るAPUシラバスの評価

### 1. これまでのシラバス検討のまとめ

学生へのシラバスのアンケート調査からAPUシラバスの検討に入る前に、文部科学省のシラバスの記述とこれまでの検討を以下にまとめる。このまとめをアンケートの検討と分析の視点として、APUにおけるシラバス



の評価を行い、シラバスの充実改善に向けての提起を行う。

- (1) シラバスは、カリキュラム体系に沿った科目概要の内容を受けたものでなければならない。
- (2) シラバスは、分野ごとに調整し、系統的・体系的な整合性を持ったものでなければならない。
- (3) シラバスは、責任ある立場の教員によってカリキュラム体系を実現しているかどうか、点検されなければならない。
- (4) シラバスは、学生が授業の概要を一目で理解できるように平易な文章で書かれなければならない。
- (5) シラバスは、各クラスの詳細な授業計画でなければならない。
- (6) シラバスは、期間全体を通じた個々の授業の進め方が提示され、学習を動機付けし促進するものでなければならない。特に「成績評価方法」について、詳細に明示していることが求められる。
- (7) シラバスは、準備学習を具体的に指示するものでなければならない。
  - ・ 課題レポートを明示していること。
  - ・ 毎回の授業スケジュールに準備学習をしておくべき文献リストと授業で取り扱う該当ページ（章や項など）が明示されていること。
- (8) シラバスは、「科目選択のための有益なガイド」となるべく情報を提供しなければならない。
- (9) シラバスは、教員の学生に対する説明責任であり、その内容は「契約書」的なものでなければならない。
- (10) シラバスは、大学の教育内容と水準を示すものであり、第3者評価の際に第1次資料となる。その公表は、大学の教育に関する社会的な説明責任の一端を担っている。

科目選択の機能（8）は、（4）～（7）を総合したものである。受講後の「契約書」的機能（9）も、（4）～（7）の履行（内容と水準）の問題である。以上から、学生のシラバスのアンケート調査の分析は、技術的な（4）も必要であるが、学生に対する学習への動機付け、準備学習の具体的な指示を内容とする（5）～（7）が学生にどのように受け止められているかが中心となる。

また、（5）～（7）は、（1）および（2）を含めて、

教員評価制度におけるシラバスの評価基準として設計する必要がある。

## 2. アンケートの設計と対象

学生がシラバスをどのように捉え、活用しているのかを調査するために、「シラバスアンケート」を実施した。このアンケートは、①授業全般に関する質問と②シラバスに関する設問により構成した。②については、学生のシラバスの活用を、「履修登録時」、「受講期間中」、「受講後」の3つの段階に分け、質問を行った。

アンケート調査は、アジア太平洋マネジメント学部の専門科目（1回生担当）の1クラスで実施した。有効回答者数は、68名であった。このアンケート調査は、サンプリング的なもので、限界を有しているが、そこで示されている傾向は、筆者の経験や教員、同僚との話しから、ほぼ妥当なものと考えられる。なお、1回生を対象に選定したのは、シラバスを初めて目にする学生で素直な意見を集約できると考えたからである。

## 3. アンケートの集計と分析

### (1) 科目選択時におけるシラバスの活用

科目選択時、シラバスを「極めて重視した」と回答した学生の内、回答者の43%が「成績評価方法を極めて重視した」と回答した（以下、%は回答者に対する比率を示す）。第2位が「授業方法」で22%である。第3位は、「毎回の授業の概要」で12%となっている。これで、回答者の80%弱となる。

次に「重視した」（複数回答可）は、「到達目標」が29%、「授業のねらい」と「授業方法」がそれぞれ26%、「学生への要望事項」、「毎回の授業の概要」、「テキスト」がそれぞれ21～22%と分散している。

以上から学生は「成績評価方法」の記述をまず押さえ、その上で「授業方法」、「到達目標」、「授業のねらい」、「毎回の授業の概要」を勘案し科目を選択している様子が見られる。

同じ項目で、「科目選択の際、より充実してほしい項目は何か」という問いに対しては、「成績評価方法」と「毎回の授業の概要」が29%、次いで「授業方法」が25%、「授業のねらい」と「到達目標」が19～20%となっている。

以上の結果から、学生は「授業の方法」と「毎回の授業の概要」、そしてその結果としての「成績評価」の

「三位一体」の詳細情報を求めていることが分かる。

### （2）シラバスの記載内容による勉学意欲のかき立て

「（シラバスの記載が勉学意欲を）特にかき立てた」と「かき立てた」の合計を見ると、（回答者を68名と仮定して）「到達目標」が25%、「成績評価方法」が24%、「毎回の授業の概要」が21%、「授業のねらい」が16%、「授業方法」が15%となっている。「授業のねらい」と「到達目標」を合わせると41%となり、授業目的や目標の提示が勉学意欲に大きく影響していることがうかがえる。

また、「毎回の授業の概要」と「授業方法」を合わせると36%となり、授業に関わる記載が相当に勉学意欲に影響していると言える。

この結果から、教員サイドにおける良く練られた「授業のねらい」と「目標の提示」およびファカルティ・ディベロップメントをはじめ学生の興味関心を引き、動機づける授業の設計が学生の勉学意欲をかき立てることになる。ここにシラバスの重要な役割、機能を見ることが出来る。

### （3）シラバスにおいて参考にしてている項目と役立っている項目

「（シラバスで）いつも参考にしてている項目は何か」という問いに対し、全体の10%が「毎回の授業の概要」と回答している。「いつも参考にしてている」と「必要に応じて参考にしてている」を加えると、32%が「成績評価方法」、28%が「毎回の授業の概要」、19%が「授業方法」と回答している。

「（シラバスは）大変役立つ」と回答した学生の内、13%が「毎回の授業の概要」と回答している。「大変役立つ」に「役立つ」を加えると、22%の学生が「毎回の授業の概要」、16%の学生が「授業方法」と「成績評価方法」と回答している。

「成績評価方法」の比率の高さは、成績基準に課題の提出や授業への参加などが提示されていることによるものと考えられる。しかし、「毎回の授業の概要」や「授業方法」は、「参考になる」、あるいは「役立つ」と評価されていることから、「授業の方法」、「毎回の授業の概要」、そして「その結果としての成績評価」の「三位一体」で、それぞれの内容を工夫すれば、出席、予習あるいは準備学習、質問や意見、復習など、学生の学習姿勢や態度を積極的なものに変える可能性がある。

### （4）小 括

以上の集計と分析の結果から、「勉学意欲のかき立て」には、「授業のねらい」と「到達目標」が有効であるが、「科目選択」、「勉学意欲のかき立て」、「受講に際しての参考度と役立ち度」の設問の全てにおいて、「授業方法」、「毎回の授業の概要」、そしてその結果としての「成績評価」の「三位一体」の項目が有効である。

以上より、シラバスの充実にむけた改善の取組は、「授業方法」「毎回の授業の概要」、「成績評価方法」の「三位一体の取組」が必要である。これは、「V-1. これまでのシラバスの検討のまとめ」でシラバスの本質としてまとめた、「各クラスの詳細な授業計画」、「成績評価方法の詳細な明示」を含めた「個々の授業の進め方の提示」、「課題レポート」、「授業ごとの文献リストと該当箇所の明示」など「準備学習の具体的指示」と合致するものである。特に、準備学習の具体的指示は、APUのシラバスにおいても、内容として不十分な点である。

## VI. まとめ—政策提起

以上から、本研究は次のようにまとめることができる。

### 1. APUシラバスの充実改善にむけた提起

毎秋、APUアカデミック・オフィスは次年度開講に向け、各教員に対し教学部長名で「シラバス作成依頼」を文書で行っている。その文書の中に、研究の第1の目的であるシラバスの充実改善に向けて、以下の5点を「留意事項」として盛り込むことを提起する。

- ①【到達目標】 抽象的な表現は避け、講義終了後教員と学生が「自己評価・検証」ができるよう、できる限り「具体的な表現」で記述する（eg.「経済理論をトータルに学ぶことによって、高度な専門知識を獲得する」などの抽象的な表現は避け、「この授業で、『経済理論』を学ぶことにより、新聞で掲載される経済記事の意味やそこから派生する問題点を学生自身で考察することができるようになる」など、具体的に記述する）。
- ②【授業のねらい・授業方法】 学生は「授業のねらい」や「授業方法」を見て、「どのような授業が展開されるのか」を具体的にイメージし、履修登録を行う。よって、できる限り「平易な文章で講義全体のイメージが掴める」よう記述する。

- ③【毎回の授業の概要】 テキストを使用する場合、「毎回の授業で取り扱う章や項」を明示し、学生が準備学習をしやすい環境を整える（eg.【第1講：テキスト第1章 第1項～第3項】など）。
- ④【成績評価方法】 レポートを課す場合、「できる限り具体的に分量や評価するポイント」を、明示する（eg.レポートの分量は、「3,000字以下にまとめること」など）。
- ⑤【学生への要望事項】 学生の「自学自習を促す」ために、「学生への要望事項」欄を積極的に活用すること（eg.「毎回の授業のトピックを「キーワード」として、これまでの新聞記事をデータベースで検索し、

事前に読んでおくこと。授業中にディスカッションを行うので、これまで社会一般での議論を把握し、自身の意見を整理しておくこと」など）。

## 2. 教員評価制度における「シラバス評価の着眼点」の作成

最後に、本研究の第2の目的である「シラバス評価の着眼点」を以下に作成する。

なお、評価は「APU教員評価制度」に基づき、「APUシラバスの5項目ごとに評価すること」、「評価は、3段階（5点、2点、0点）で実施する」こととする。

表3 教員評価制度におけるシラバス評価の着眼点

No	シラバス項目	評価の着眼点	評価点
1	全体	・シラバスの内容が「科目概要」に対応していること。	
2	到達目標	・「到達すべき内容と水準」が学生にわかりやすく設定され、可能な限り講義終了後教員と学生が自己点検・検証ができるよう「具体的な到達目標」が提示されていること。 ・言語科目等「数値」で目標を示すことが可能な科目については、「数値目標」が示されていること（TOEICの点数など）。	
3	授業のねらい・授業方法	・学生が「授業の進行をイメージ」できるよう、具体的に書かれていること。	
4	毎回の授業の概要	・毎回の授業のトピック（主題）が記載されていること。 ・テキストを使用する場合、「授業ごとに取扱予定の章や項」が明示されていること。 ・「自学自習」、「準備学習」を具体的に指示されていること。（「学生への要望事項」欄での記載でも可）	
5	成績評価方法	・「APUの評価基準」に準拠していること（期末試験は、全体評価の50%以下となっていること等）。 ・レポートを課す場合、「分量」や「評価するポイント」について明示していること。	

**【注】**

- 1) 文部科学省の、「大学における教育内容・方法の改善について」(2005年6月26日引用) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm)
- 2) この点については、2005年3月22日APUニューチャレンジ教学刷新部会で『教学刷新の基本的方向について』という学内文書で既に議論されている。
- 3) 荻谷剛彦 『アメリカの大学・ニッポンの大学』(TA・シラバス・授業評価) 玉川大学出版部 2000年
- 4) Office of Instructional Development, University of California, Los Angeles.  
<http://www.oid.ucla.edu/units/tatp/pedagogy/syllabi/view?searchterm=syllabus>  
(2005年6月13日引用)
- 5) Harris, Mary B. "The purposes of a syllabus" College Teaching March 22, 2002
- 6) 立命館大学 大学教育開発・支援センター「第1回「シラバス開発に向けた懇談会」開催報告」2005年10月7日
- 7) [http://www.usnews.com/usnews/edu/college/directory/brief/drglance\\_2155\\_brief.php](http://www.usnews.com/usnews/edu/college/directory/brief/drglance_2155_brief.php)  
(2005年6月26引用)
- 8) 筆者は、インターネット環境が充実したアメリカの各大学はシラバスを公開しているだろうと期待していた。しかし、実際は「科目概要」はWEB上で検索できるが、シラバスはほとんど掲載されていない。私が調べた限り、ハーバード大学がもっともシラバスを公開している大学であった。UCLA, Office of Instructional DevelopmentのWEBページに、「シラバスは第1回目の講義で配布する」とあり、また「変更があった場合は文書で配布する」とあるので、私はアメリカの大学におけるシラバスは、必ずしもオンラインに掲載されていないものと考えている。
- 9) 2005年度、APU教学部が「科目概要」を整備した。

## Proposal for Improvement of Syllabus through Faculty Evaluation System

KADOUCHI, Akira (Assistant Administrative Manager, Administration Office, Ritsumeikan Asia Pacific University)

ITO, Noboru (Senior Researcher, Research Center for Higher Education Administration)

TANINAKA, Noboru (Senior Deputy Director, Ritsumeikan Asia Pacific University)

WAKAI, Masue (Manager of Administration Office, Ritsumeikan Asia Pacific University)

### Keywords

Course Description ・ Syllabus being viewed as a "contract" ・ Syllabus that encourages self-study, Self-instruction ・ Syllabus that shows educational content and standards ・ Lesson methods, General description of each lesson, Grade evaluation methods ・ Point of observation of syllabus evaluation

### Summary

The purpose of this research is to: 1) Define the "role of the syllabus" in playing a role in students' education, "to make a proposal for the enhancement and improvement of the syllabus" and 2) "to create and propose a point of observation for syllabus evaluation".

In re-evaluating the "definition and role of the syllabus", this paper will first bring up the "Syllabus of Harvard University" as a case study. Interviews with university professors and students, as well as an "Questionnaire Survey on the Syllabus" was conducted and analyzed. Based on this sequence of studies, this paper will explain issues that should be resolved for the enhancement and improvement of the syllabus in the future, such as the relationship and importance of the syllabus and course descriptions, and the role of the syllabus to encourage self-study, self-instruction. Two proposals for the above objectives will be made on the basis of these study results.

The syllabus is a "mirror that shows lesson content". Therefore, "the improvement of the syllabus" is linked to the "improvement of lessons" and is believed to be a factor contributing to the "learning and growth of students".